

たまものまえあさひのたもと

玉藻前曦袂

〔解 説〕文化三年（一八〇六）大阪御霊境内芝居初演。寛延四年（一七五一）大坂豊竹座初演を書きかえた五段・時代物。初段は天竺、二段目は唐土、三段目以降は日本が舞台となっています。金毛九尾の妖狐が三国を股にかけて国家転覆を企て、最後には失敗して那須野が原の殺生石になるといのが全体の筋です。

〔あらすじ〕鳥羽院の兄宮・薄雲皇子は反逆を企て、鷲塚金藤次に命じて故右大臣道春家に伝わる獅子王の剣を盗ませます。また道春の娘・桂姫を差し出すよう迫りますが、安倍晴明の弟・采女之助に恋する桂姫は拒否していました。〔道春館の段〕道春の後室・萩の方が采女之助に獅子王の剣の探索を頼んでいると、薄雲皇子の使いとして鷲塚金藤次がやってきて、獅子王の剣を差し出すか、桂姫の首を討って渡すかを迫ります。萩の方は桂姫が祇園参籠の帰りに拾った子であることを明かし、実子の初花姫を身代わりにと頼みますが、金藤次は聞き入れません。そこで萩の方は姉妹に双六をさせ、負けた方の首を討つように頼みます。姉妹は自分が犠牲にと双六を競い、妹の初花姫が負けますが、金藤次が討ったのは桂姫でした。怒った采女之助に刺され深手を追った金藤次は、実は桂姫は自分の娘であることと、獅子王の剣も薄雲皇子の命令で自分が盗んだことを語り、息絶えます。（一般社団法人 義太夫協会発行）

道春館の段

入相時

早や夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音もいとゞ、淋しき黄昏や、間毎を、照らす銀燭の光り、まばゆき白書院、程もあらせず入来る鷲塚金藤次秀国、素袍の肩肘いかつげに、上座にこそは押し直る。かくと知らせに館の後室。衣紋正しく出迎ひ

「御上使様には御苦勞千万、皇子様より御誼の趣き、仰せ聞けられ下さりませ」

と、辞讓の言葉に一揖し

「上意の次第余の儀にあらず、皇子かねぐ御懇望ありし獅子王の劍、今日中にさし上げるか、さなくば、娘桂姫が首討って渡さるゝか、二つに一つの御返答、ただ今仰せ聞けられよ」

「ハアこは存じがけなき御難題。その劍は紛失致し、所々方々と尋ぬれども、今において行方知れず、今しばらくの御容赦を」

「ア、イヤそりやならぬ。皇子御心をかけられし桂姫、たびぐ催促あると言へども、とやかに言ひ延ばし、打捨て置かるゝ事、貴族の威勢にぶき似たりとてのほか御憤り、劍がなくば桂姫、首にしてお渡しなされ」

と退引きさせぬ釘かすがい、胸にひつしと萩の方、途方涙にくれ給ふ。後に始終桂姫、こなたの間には初花が忍んで様子立聞くとも、知らず御台は涙をはらひ

「とても手詰めになる上は、いづれ遁れぬ娘が命、未練の申し事ながら、一通り聞いてたべ、過ぎ去り給ふ夫道春、夫婦の中に子なきを憂ひ、清水のほとりなる、三神の社へ立願込め、三七日の参籠、その

帰るさに産子の泣声、肌に添へしは雌竜めりようの鍬形、

ア由ある人の胤ならん、神の御告げと連れ帰り、育て上げしは桂姫、間もなく設けしアノ初花、右と左

に月花と、眺め暮らせし、姉妹を、是非に一人はな命。殺さにやならぬ品となり。せめて夫がましま

さば、問ひ談合もあらうもの、何を言うても身一つにかゝる憂き目も前生なまじゆうの、報ひか罪か悲しや」

と身を悔みたる御涙、とゞめ兼ねてぞ見えけるが、思案極めて顔を上げ

「杖柱とも思ふ姉妹、勝り劣りはなけれども、剣で殺さば三神への畏れといひ、殊に義理ある姉娘、

こゝの道理を汲み分けて、妹の初花を、代りに立て給はらば、この上もなき御情」

と、言はせも果てず声荒らげ

「ム、スリヤ三神の咎めは畏れ、神の御末の皇子の

仰せ、御用ひはなされぬか、よしそれはともあれ、

上意を受けた某に、身代りなどは思ひもよらず、無益の間答聞く耳持たぬ。サア只今」

と詰寄つて、いつかなひるまぬ、その顔色。叶はぬところ胸を据ゑ

「イヤなう御上使。武士は、物の哀れを知るといふ。自らが一つの願ひはコレこの双六盤。二人の命を天

道の指図に任せ、負けたる方の首を討たば、せめてはそれを定業とあきらめらるゝ事もあらう。どうぞ

この儀を御了簡コレ、慈悲ぢや情ぢや。聞き分けて」

と、義理と恩愛二筋に、伝ふ涙は雨やさめ、身に降りかゝる桂姫、母の情のありがたさ

「お慈悲」

と言ふも口ごもる。振の袂に、しらすめの晴れ間は更に見えざりき

「エ、さまざまの世迷言、見物するもまどろしけれ

ど、ハテ何とせう是非がない、サきりく〜とお始め
なされ、ガ勝負の付くがすぐに寂滅」

「ヲ、なるほどく〜、それと明かさば女氣の、歎き
に心かきくもり、取り乱しては詮もなし、たゞよそ
ながら暇乞ひ、一思ひに」

と言ひさして、詞泣くく〜取り出す

「娘々」

と呼び出す

「アイ」

と返事も一樣に、かくとは誰も白小袖、死出の晴着
と姉妹が、姿も対の雪柳、しをれ出でたる屠所の道。

羊の歩みたど〜と最期の、座にぞ押直る。一目見
るより萩の方『さてはやうすを聞きしか』と、先を

取られて今更に、とかう答へも涙なる

さらぬ体

「ナウ娘、御上使への御馳走に、日頃手練の双六を
お目にかきや。一世一度の晴れ芸なれば、二人共に
大事にかけ、どちらも負けてたもんなや」

と、割つては言はぬ親心、片方の盤を、引き寄せて、
これがこの世の別れかと、思へば直す手もたゆく
かゝる例もあや錦。袋の紐をとく〜と、さいの河

原を、この世から、積む石数も姉妹の、年も重目に

持つ涙、互ひに筒を取り交し、指す手引く手も端手
ならず、切つつ切られつ修羅道の、苦しみ受けん悲

しやと、思へば筒も手もふるひ、しどろもどろの石
づかひ、姉をかばへば妹を助けんものと双方が、

重一、巻六、五二、四三、果てしなれば、氣をい
らち

「ア、ぐづ〜と埒のあかぬ長詮議。早く勝負をつ

け召され、早く――」

と驚塚が、せがみ立つれば姉妹も、こゝぞ一生懸命と心尽しの盤の面。母は胸まで突つかくる涙呑み込み呑み込んで背ける顔に露時雨。乞目こひめを振りし姉よりも妹が心の嬉しさ苦しさ

「サア――姉様がお勝ちなされた」

と、首さし伸べて覚悟の体。見るに母親保ち兼ね『わつ』とばかりに、伏し沈む。

刀すらりと金藤次

「勝負は見えた観念」

とひらめく稻妻、姉姫の首は前にぞ落ちにける

「ナウ悲しや」

と初花姫。あへなき骸からに取り付いて悲歎の涙果てしなき。泣く目をはらひ萩の方、上使の傍に詰め寄つて

「ヤアうろたへたか金藤次。勝負に勝つた姉娘。なぜ斬つた。サなぜ殺した、それと悟つて身代りと初花が心ざし。水の泡となったのも、皆その方が無得心。たばかられたが口惜しい」

と身を震はして腹立ち涙。上見ぬ驚塚せゝら笑ひ「ハハハハハハ、しやらくさい咎め立て。勝負に勝たうが勝つまいが、仰せを受けた桂姫、首討つたが何誤り。皇子の御心背く方々、悪く身動き召さるゝと、どいつこいつの容赦は致さぬ。すつ込んでおゐやれ」と、権威を甲に傍若無人。振袖引き裂き首押し包み、睨み散らして立ち出づる

こいにようぼうそめわけたづな

恋女房染分手綱

〔解説〕

宝暦元年（一七五一年）竹本座初演。吉田冠子・三好松洛の合作による全十三段の時代物。近松門左衛門の「丹波与作待夜小室節」の改作とされていますが、十段目「道中双六の段」、それに続く「重の井子別れの段」は、原文がそのまま使われています。

〔あらすじ〕

丹波の藩主由留木（ゆるぎ）家の家老、伊達与之兵衛のせがれ、与作は竹村定之進（たけむらさだのしん）の娘重の井と通じ、与之助という子を設けますが、悪者の讒言で国を追われ、馬追いとなります。その後、重の井は由留木家の調姫の乳人となり、関東へ輿入れする姫君のお供で江戸へ出発しようとしています。

数え年でまだ十二歳と幼い調姫は、関東へ行くことを嫌がりむづがっているので、門前の馬方三吉が持っている道中双六で機嫌をとることにします。一番に上がった姫はすっかり機嫌を直して早く東へ行こうと言い出すのでした。

道中双六の段

たつ年月も迫り来て、由留木殿のお湯殿子、調の姫、はや十二歳になり給へば、かねがねの約束にて、東の高家入間殿へ御婚礼極まり、蕾から取る花嫁御けふ旅立ちの御供揃へ、上下ざぐめき賑はえり

刻限は巳の上刻との定めにて、お迎ひの主家老本田弥三左衛門、数献の盃、足もとはよろ／＼と、猩々緋の道中羽織、白いところは髪ばかり、きんか頭に顔色も、しゅちんの立ッ付け、りりしげに

「何んと／＼お供廻りが揃ったらお先手から乗り出し召され。コレサ文左、源吾左、身はおさへを乗り申す。万事夜前申し渡す通りだ。若党仲間あらしこ小者に至るまで大洒をいたさないやうに、馬つぎ船渡し等にて強気がさつを仕つたらば曲事でお

じやんべい。またとき泊り／＼の赤前だれにじやんべいから致さないやうに。第一御乗物の先で見苦しい。

さりながらとき、長の道中下々が退屈致すべい。もしぬれなどを企つるとも目立たぬやうに物影へ寄つてちよ／＼／＼と濡れたがよくおんじやる。めでたき折からと申し、ことに女中のお供だ。

少々の事は見遁しにして置き召されつちや」

「あつ」と答へて幸領ども、「サア御立ち」と催すところに、奥より女中声々に

「ア、待たつしやれ／＼、気の毒やお姫様、『関東へ行くことは嫌ぢや／＼』とやんちゃばかり御意なされ、お袋さまも殿様もたらしつ叱つゝ遊ばせども、『どうでも嫌ぢや』とおむつかり、お乳の人の重の井殿いろ／＼と申されても『それほど江戸へ行きたくば乳母ばかり行きをれ』と、お乳の人の背中をと

ん／＼とぶたしやんして、御機嫌がそこねました」と云ふところへ、眉泣きはがし姫君は

「江戸も東もこちや嫌ぢや。おれは行かぬ」

と泣く／＼走り出で給へば、侍衆も下々も御門にかけ出で、家老のほか男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を変へ

「コレ申しお姫様、下々の子供さへ、九つ十では物の聞き訳ござります。あれ見さんせ。百里あちらの山川越えて、白髪かづいた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに参つて、江戸へござれば入間殿の惣領嫁御とかしづかれる御身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば女でこそあれ、この乳母は腹を切らねばならぬ。サアよいお子ぢやお輿に召せ」
とおどしてもそやしても

「いや／＼みな騙しぢや、なんの東がよいところ。

腰元どもが唄うを聞きや。サアみんなこゝへ出て、いつもの歌を唄へ／＼」

とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし、十三なが手をそろへ

「山も見えざるかりそめに江戸三界へ行かんしていつ戻らんすことぢややら、殺して置いていかんせの、放ちはやらじと泣きければ

「ア、おきや／＼。お大名の宮仕へ、琴の組でも唄はいで誰に習うて端手な歌、姫君などに教やんな。必ず置いて貰はう」

とお乳の人の不機嫌さ、本田もあまりせんかたなく

「申しお姫様、あれは人の口てんごう、花のお江戸は京まさり、浅草上野の花盛り、まった堺町木挽町のでんつく／＼でこの坊、弁慶や金平がえいやつ

と、えいなどと斬り合を見せませう。道中の面白くこと富士の山と申す天まで届く山を御目にかけます。先年身どもが御結納の御使者に参つたときはお姫様はまだお二つ。なにとぞ御婚礼のお迎ひに参りたいと申したが、光陰矢の如しと今年丁度十一年。そのやうにやんちゃおつしやるまで長生きを致さうとは存ぜなんだ。さあ、御機嫌直して早うお輿に召しませい」

と力いっばいすかしても

「いや、江戸へは行きはせぬ。どうでも嫌ぢや」

と泣き給へば、お乳もいまはあぐみ果て

「どうしてよからう」

御家老も、あきれてこそはいたりけれ。お仲居の若菜門外より走り入り

「ナウお乳の人様おもしろい事がござります。十ば

かりの剃りさげのちつぽけな馬方が、道中双六とやら東海道の絵を広げ、味なこととして遊びます。御機嫌直しにお目につけなされませ」

「オ、ようぞ気が付いた。それは聞き及んだ。道中の絵を見せまし、お心も移るため馬方でも子供は大事ない。お赦しぢや、その丁稚に持つて参れと云うておじゃ」

「心得ました」

と御門に出で、連れ立ち来たる。馬方が片肌ぬいでさびき髪、御前近くも不遠慮に縁先に揚げ足して

「ヤレ、ありさまたちはあたつぽこしゆも

ない、朋輩どもとかげどくに道中双六打つて、沓の錢ほどしてこませうと思うたに、人呼び廻つてなんでやる。ハレヤレ、きり、乗らつしやれ。

馬やろい」

とぞつかうどなる

「てさて利巧な野郎ぢやな。船頭、馬方、お乳の人、こちもそちらと同じこと。シテ年はいくつ名はなんといふぞ」

「年は今年十一。五つの年から馬追うて、一代若衆にならずに生へぬきの念者ぢや。ところで名は自然薯の三吉といひやんす」

「オ、さッてもよい名ぢや。聞けば道中双六があるげな、腰元衆も打って見や、姫さまもあそばせ。サア三吉もこゝへ来い。苦しうない」

と呼びければ

「あい」

と云ふより慮外をも返り短かき煙管の煙。立ちまじりたる女中の傍、そくはぬやうに見えざるは、さすが童の一徳と、絵を取り出し、双六をみな打交り遊

ばるゝ

「これく御覽ぜ打たしやんせ。これこそ五十三次を、ゐながら歩む膝、膝栗毛馬はいしい道中双六。

南無諸仏分身と、書いた六字を六角の、賽は桜木花の都を真中に思ひくゝのしるしを置いて、さらばこちらから打出の浜。大津へ三里こゝで矢橋の舟賃が出舟。召せく旅人の乗りおくれじと、どさ草津。

お姫様よりまづ乳母が餅。一口二口みな口どちやうをどり越え、坂へ越すのも賽次第。賽を振れく。

降るや鈴鹿をあとに下れば負けまいと急きに関より亀山に、煙草火打ちの石薬師。オット桑名の、舟渡し。所々の名物買うて、お錢あしつくぐ手鞠子に、

ひいふうみいよ、府中江尻にすつとんとん。とんと打つたる、沖つ波松原はるゝ、膏薬買うて月を吸ひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原の花の蒲焼き名物の、

うなぎの肌沼津の宿。三嶋越ゆれば箱根へ三里。賽
目次第に閑越ゆる。悪い目打てば手判を取りに、元
の京都へ立ち帰る、合点か」

「オ、呑み込んだ」

「小田原外郎大磯平塚藤沢の、さはりもなしに双六
のさい先もよし門出よし。道中早めて戸塚はと急ぐ
保土ヶ谷神奈川越え、川崎を越え、品川越え、まっ
さがけのお姫様。一番勝ちの勝色の花のお江戸に
着き給ふ。一のうらは双六の幸ひあり悦びあり、慰
みありける道中」

とどつと

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

